

日蓮大聖人御書全集

いちだいししょうぎようたいい

一代聖教大意

新版
326
〜
348

いちだいしようぎようたいい

一代聖教大意

しょうか ねん がつ にち
正嘉2年('58) 2月14日
さい
37歳

しきよう

四教

いち

さんぞうきよう

に

つうきよう

さん

べつきよう

し

えんぎよう

一には三蔵教、二には通教、三には別教、四には円教

なり。

はじ

さんぞうきよう

あこんぎよう こころ

きよう

こころ

始めに三蔵教とは、阿含經の意なり。この經の意は、

ろくどう

ほか あ

ろくどう

じ

が ちく

しゆ

にん

てん

六道より外を明かさず、ただ六道（地・餓・畜・修・人・天）

うち

いんが

どうり

あ

しょうほう

じつかい

あ

の内の因果の道理を明かす。ただし、正報は十界を明かす

じ

が

ちく

しゆ

にん

てん

しょうもん

えんがく

ぼさつ

ぶつ

なり。地・餓・畜・修・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏な

えほう むつ

ろっかい もう

おし こころ

り。依報が六つにてあれば、六界と申すなり。この教えの意

ろくどう

ほか あ

さんがい

ほか じょうど もう

は、六道より外を明かさざれば、三界より外に浄土と申す

しょうじよ

い

さんぜ

ほとけ

しだいしだい

しゅつせ

生処ありと云わず。また三世に仏は次第次第に出世すと

い

よこ

じつぼう

なら

ほとけ あ

い

は云えども、横に十方に並べて仏有りとも云わず。

さんぞう

いち

きようぞう

い

じょうぞう

に

りつぞう

三蔵とは、一には経蔵へまた云わく定蔵、二には律蔵

い

かいぞう

さん

ろんぞう

い

えぞう

へまた云わく戒蔵、三には論蔵へまた云わく慧蔵なり。

きよう

りつ ん

じよう

かい

え

かい

じよう

え

え

じよう

かい

ただし、経・律・論の定・戒・慧、戒・定・慧、慧・定・戒

かいぞう

ごかい

はつかい

じつかい

じゅうぜんかい

ということあるなり。戒蔵とは、五戒・八戒・十戒・十善戒・

にひやくごじっかい

ごひやっかい

じようぞう

みぜん

じよう

な

二百五十戒・五百戒なり。定蔵とは、味禪へ定の名なり。

じようぜん むろぜん えぞう
浄禅・無漏禅なり。慧蔵とは、く くう むじよう むが ちえ
り。 苦・空・無常・無我の智慧な

かい じよう え しようれつ かみ かい たも もの
戒・定・慧の勝劣というは、ただ上の戒ばかりを持つ者

さんがい うち よつかい になん てん しよう う ほんぷ
は、三界の内の欲界の人・天に生を受くる凡夫なり。ただ

かみ じよう しゆ ひと かい たも じよう ちから
上の定ばかりを修する人は、戒を持たざれども、定の力

よ かみ かい ぐ じよう うち みぜん じようぜん
に依つて上の戒を具するなり。この定の内に、味禅・浄禅

さんがい うち しきかい むしきかい しよう むろぜん しようもん えん
は、三界の内、色界・無色界へ生ず。無漏禅は、声聞・縁

かく な けんじ だん つ けしんめつち え
覚と成つて見思を断じ尽くし、灰身滅智するなり。慧はま

く くう むじよう むが われ しきしん かん かみ かい じよう
た苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば、上の戒・定を

じねん ぐそく

しょうもん

えんがく

な

ゆえ

かい

自然に具足して、声聞・縁覚とも成るなり。故に、戒より

じよう すぐ じよう

え すぐ

さんぞうきよう

定は勝れ、定より慧は勝れたり。しかれども、この三蔵教

こころ

かい ほんたい

あごんぎよう

そうけつ

の意は、戒が本体にてあるなり。されば、阿含経を総結す

ゆいきようぎよう

かい もう

る遺教経には戒を説けるなり。

おし

こころ

えほう

ろっかい

しょうほう

じっかい

あ

この教えの意は、依報には六界、正報には十界を明か

えほう

したが

ろっかい

あ

きよう

な

せども、依報に随つて、六界を明かす経と名づくるなり。

しょうほう

じっかい

あ

えんがく

ぼさつ

ほとけ

しょうもん

また正報に十界を明かせども、縁覚・菩薩・仏も声聞の

さと

す

しょうもんきよう

もう

ほとけ

ぼさつ

覚りを過ぎざれば、ただ声聞教と申す。されば、仏も菩薩

えんがく

けしんめつち

おし

も縁覚も灰身滅智する教えなり。

しょうもん
声聞について七賢・七聖の位あり。六道は凡夫なり。

しょうもん

しちげん

しちしょう

くらい

ろくどう

ぼんぷ

いち
一、五停心

さんげん
三賢

に
二、別想念処

ち
智ということなり

さん
三、総想念処

しちげん
七賢

いち
一、煥法

に
二、頂法

しぜんこん
四善根

さん
三、忍法

し
四、世第一法

しちげん
この七賢の位は、
ろくどう
六道の凡夫より賢く、
かしこ
生死を厭い、

しちげん

くらい

ろくどう

ぼんぷ

かしこ

しょうじ

いと

煩悩ぼんのうを具ぐしながら煩悩ぼんのうを發おこさざる賢かしこき人ひとなり。

例れいせば、外典げてんの許由きょゆう・巢父そうほがごとし。

一、数息いち すそく 息いきを数かぞえて散乱さんらんを治じす

二、不淨ふじよう 身みの不淨ふじようを觀かんじて貪欲とんよくを治じす

三、慈悲さん じひ 慈悲じひを觀かんじて嫉妬しつとを治じす

四、因緣し いんねん 十二因緣じゅうに いんねんを觀かんじて愚癡ぐちを治じす

五、界方便ご かいほうべん 地ち・水すい・火か・風ふう・空くう・識しきの六界ろっかいを觀かんじて障道しょうどうを治じす

五停心ごじようしん

また云いわく「念仏ねんぶつ」と

べつそうねんじよ よつ
別想念処に四つ

いち しん
一、身

げどう しん じよう い
外道は身を淨と云い、 仏は無淨と説きたもう

に じゆ
二、受

げどう さんがい らく い
外道は三界を樂と云い、 仏は苦と説きたもう

さん しん
三、心

げどう しん じよう い
外道は心を常と云い、 仏は無常と説きたもう

し ほう
四、法

げどう いっさいしゆじよう があ い
外道は一切衆生に我有りと云い、 仏は無我と説きたもう

げどう じよう
外道は常

しん
〈心〉

らく
・樂

じゆ
〈受〉

が
・我

ほう
〈法〉

じよう
・淨

しん
〈身〉

ほとけ
・仏

く
・苦

ふじよう
・不淨

むじよう
・無常

むが
・無我

と
と説く

そうそうねじよ
總想念処

さき く
先の苦

ふじよう
・不淨

むじよう
・無常

むが
・無我

しゆれん
を修練して

かん
観ずるなり

ねんぼう
煥法

ちえ ひ
智慧の火

ぼんのう
・煩惱

まがき
・籬

む
を蒸せば

けむり
・煙

た
の立つなり

ゆえ
・故に

なんぼう
・煥法

い
と云う

頂法 ちようぼう

山の頂に登つて四方を見るに曇り無きがごとし。世間・

出世間の因果の道理を委しく知つて闇きこと無きに譬えた

るなり。始め五停心よりこの頂法に至るまでは退位と申し

て、悪縁に値えば悪道に墮つ。しかれども、この頂法の善根

は失せずと習うなり

忍法 にんぼう

この位に入る人は永く悪道に墮ちず

世第一法 せだいいっぼう

この位に至るまでは賢人なり。但今、聖人と成るべきなり

一、見道に二つ

随信行

鈍根

随法行

利根

正しょうということなり

一、信解

鈍根

七聖しちしょうに三つ

二、修道に三つ

二、見得

利根

三、無学道に二つ

慧解脱

鈍

阿羅漢

俱解脱

利

見思けんじの煩惱ぼんのうを断だんずる者ものを聖しょうと云いう。

この聖人しょうにんに三道さんどうあり。

けんどう

けんじ

うち

けんわく

だん

つ

けんわく

つ

見道とは、見思の内の見惑を断じ尽くす。この見惑を尽く

ひと

しよか

しようじや

もう

ひと

よっかい

にん

てん

す人をば、初果の聖者と申す。この人は、欲界の人・天に

う

なが

じ

が

ちく

しゆ

しあくしゆ

お

は生まるれども、永く地・餓・畜・修の四悪趣には堕ちず。

てんだい

けんわく

やぶ

ゆえ

しあくしゆ

はな

もん

ひと

天台云わく「見惑を破るが故に、四悪趣を離る」文。この人

しわく

だん

とん

じん

ちしん

あ

とんよく

は、いまだ思惑を断ぜざれば、貪・瞋・癡身に有り。貪欲あ

ゆえ

めたい

たにん

め

おか

しんに

る故に、妻を帯す。しかれども、他人の妻を犯さず。瞋恚あ

ころ

すき

じ

耕

むしじねん

れども、ものを殺さず。鋤をもつて地をすけば、虫自然に

しすん

ぐち

ゆえ

わ

み

しよか

しようじや

し

四寸去る。愚癡なる故に、我が身初果の聖者と知らず。

ばしやるん

い

しよか

しようじや

めつま

はちじゆういちどいちや

おか

婆沙論に云わく「初果の聖者は、妻を八十一度一夜に犯す」

しゅい てんたい げしやく い しょか じ す むししすんはな
取意。天台の解釈に云わく「初果、地を耕くに虫四寸離る。

どうぐ ちから
道共の力なり」。

だいしか しょうじや あらかん むがく い ふしょう い
第四果の聖者・阿羅漢を無学と云い、また不生と云う。

なが けんじ だん つ さんがいろくどう しょう つ のち
永く見思を断じ尽くして、三界六道にこの生の尽きて後、

しょう
生ずべからず。見思の煩惱の無きが故なり。

おし こころ さんがいろくどう ほか ところ あ
またこの教えの意は、三界六道より外に処を明かさざ

ほか しょうじよ あ し み ぼんのうあ し
れば、外の生処有りと知らず、身に煩惱有りと知らず。ま

しょういん けしんめつつ もう み こころ 失 こくう
た、生因なく、ただ灰身滅智と申して、身も心もうせ、虚空

な なら ほけきょう なが ほとけ 成
のごとく成るべしと習う。法華經にあらずば永く仏になる

べからずと云うは、二乗にじようこれなり。

この教えの修行の時節は、声聞は、三生さんしよう〈鈍根〉・六十劫ろくじつこう

〈利根〉なり。また一類の最上利根の声聞は、一生の内いちしいううち

に阿羅漢の位に登ることあり。縁覚は、四生ししよう〈鈍根〉・百劫ひやくこう

〈利根〉なり。菩薩は、一向凡夫にて見思を断ぜず、しか

も、四弘誓願を發し、六度万行を修し、三僧祇・百大劫を

経て、三藏教の仏と成る。仏と成る時、始めて見思を断

じ尽くすなり。

見惑とは、一には身見しんけん〈また云わく、我見〉、二には辺見へんけん

だんけん じょうけん さん じゃけん はつむけん し

〈断見・常見〉、三には邪見〈また云わく、撥無見と〉、四に

けんじゅけん い おと すぐ おも けん ご

は見取見〈また云わく、劣れるを勝ると謂う見と〉、五には

かいこんじゅけん い いん いん け どう

戒禁取見〈また云わく、因にあらざるを因と計し、道にあ

どう け けん けんわく はちじゅうはちあ

らざるを道と計する見と〉なり。見惑は八十八有れども、

いつ もと しわく いち とん に しん

この五つが本にてあるなり。思惑とは、一には貪、二には瞋、

さん ち し まん しわく はちじゅういちあ よつ

三には癡、四には慢なり。思惑は八十一有れども、この四

もと

つが本にてあるなり。

ほうもん あごんぎようしじっかん ばしやろんにひやつかん しようりろん

この法門は、阿含經四十卷・婆沙論二百卷・正理論・

けんしゅうろん くしやろん あ べつ くしやしゅう もう

顯宗論・俱舍論につぶさに明かせり。別して俱舍宗と申す

しゅうあ

もろもろ

だいじよう

ほうもんしゅうしゅうあ

宗有り。また諸の大乗にこの法門少々明かしたるこ

い

ほうどうぶ

きよう

ねはんぎようとう

けごん

とあり。謂わく、方等部の経、涅槃経等なり。ただし、華嚴・

はんにな

ほつけ

ほうもんな

般若・法華にはこの法門無し。

つぎ

つうぎよう

だいじよう

はじ

かい

じよう

え

さんがく

次に通教へ大乘の始めなり。また戒・定・慧の三学あ

おし

掟

たいし

ろくどう

い

しやうぶんりこん

り。この教えのおきて、大旨は六道を出でず。少分利根な

ぼさつ

ろくどう

ほか

お

い

しやうもん

えんがく

る菩薩、六道より外に推し出だすことあり。声聞・縁覚・

ぼさつ

とも

ひと

ほうもん

なら

けんじ

さんにんとも

だん

菩薩、共に一つ法門を習い、見思を三人共に断ず。しかれ

しやうもん

えんがく

けしんめつち

おも

い

もの

い

ども声聞・縁覚、灰身滅智の意いに入る者もあり、入らざ

もの
る者もあり。

おし じゅうじ
この教えに十地あり。

いち けんねじ
一、乾慧地

さんげん
三賢

賢人

に しょうじ
二、性地

しぜんこん
四善根

けんどう くらい
見道の位

さん はちにんじ
三、八人地

しょうにん
聖人

し けんじ
四、見地

しよか しょうにん
初果の聖人

けんわく だん
見惑を断ず

じゅうじ
十地

ご はくじ
五、薄地

ろく りよくじ
六、離欲地

しわく だん
思惑を断ず

しち いべんじ
七、已弃地

あらかん
阿羅漢

けんじ だん っ
見思を断じ尽くす

八、辟支仏地 はち びやくしぶつじ

見思を尽くす けんじ っ

九、菩薩地 く ぼさつじ

十、仏地 じゅう ぶつじ

見思を断じ尽くす けんじ だん っ

この通教の法門は、別して一經に限らず、方等經・

般若經・心經・觀經・阿弥陀經・双觀經・金剛般若經等 はんによきよう しんきよう かんきよう あみだきよう そうかんきよう こんごうはんによきようとう

の經に散在せり。 きよう さんざい

この通教の修行の時節は、動逾塵劫を経て仏に成ると

習うなり。また一類の疾く成るといふ辺もあり。 な なら しょうぎよう しゆぎよう じせつ どうゆじんごう へ ほとけ な

已上、上の藏・通二教には、六道の凡夫本より仏性あり いじよう しみ ぞう つうにきよう ろくどう ぼんぷもと ぶつしよう

已上、上の藏・通二教には、六道の凡夫本より仏性あり いじよう しみ ぞう つうにきよう ろくどう ぼんぷもと ぶつしよう

とも談ぜず、始めて修すれば声聞・縁覚・菩薩・仏とおも
いおもいに成ると談ずる教えなり。

次に別教。また戒・定・慧の三学を談ず。

この教えはただ菩薩ばかりにて、声聞・縁覚を雑えず。

菩薩戒とは、三聚浄戒なり。五戒、八戒、十戒・十善戒、

二百五十戒、五百戒、梵網の五十八の戒、瓔珞の十無尽戒、

華嚴の十戒、涅槃經の自行の五支戒・護他の十戒、大論の

十戒、これらは皆、菩薩の三聚浄戒の内、摂律儀戒なり。

しょうぜんぼうかい

はちまんしせん

ほうもん

せつ

にようやくうじようかい

撰善法戒とは、八万四千の法門を撰す。饒益有情戒と

しぐせいがん

じよう

かんれん

くん

じゆ

ししゆ

ぜんじよう

は、四弘誓願なり。定とは、観・練・薰・修の四種の禅定

え

しんしようじつかい

ほうもん

なり。慧とは、心生十界の法門なり。

ごじゆうにい た

五十二位を立つ。

ごじゆうにい

いち

じっしん

に

じゆうじゆう

さん

じゆうぎよう

五十二位とは、一には十信、二には十住、三には十行、

し

じゆうえこう

ご

じゆうじ

とうがく

ひと

くらい

みようかく

四には十回向、五には十地、等覚へ二つの位なり、妙覚

ひと

くらい

いじよう

ごじゆうにい

へ一つの位、已上、五十二位なり。

じっしん

十信

たいい

退位

ぼんぷぼさつ

凡夫菩薩。

けんじ

いまだ見思を断ぜず

じゆうじゆう

十住

十行 じゅうぎょう

不退位 ふたいい

見思・塵沙を断ぜる菩薩 けんじ じんじや だん ぼさつ

五十二位 ごじゅうにい

十回向 じゅうえこう

十地 じゅうじ

無明を断ぜる菩薩 むみょう だん ぼさつ

等覺 とうがく

妙覺 みょうかく

無明を断じ尽くせる仏 むみょう だん っ ほとけ

この教えは大乗なり。戒・定・慧を明かす。戒は前の蔵・

通二教に似ず、尽未来際の戒、金剛法戒なり。

この教えの菩薩は、三悪道をば恐ろしとせず、二乗の道を

三悪道と云う。地・餓・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず、

にじよう どう ほとけ しゆし だん だいしようごんろん い

二乗の道は仏の種子を断ず。大莊嚴論に云わく「つねに

じごく お だいぼだい さ じり こころ

地獄に処るといえども、大菩提を障えず。もし自利の心を

お だいぼだい さわ おし なら まこと

起こさば、これ大菩提の障りなり」。この教えの習いは、真

あくどう さんむい かきよう まこと あくにん にじよう た

の悪道とは三無為の火阬なり、真の悪人とは二乗を立つる

あく つく にじよう かい たも

なり。されば、「悪をば造るとも、二乗の戒をば持たじ」と

だん

談ず。

ゆえ だいはんにやきよう い ぼさつ ごうがしやこう

故に、大般若経に云わく「もし菩薩、たとい恒河沙劫に

みよう ごよく う ぼさつかい ぼん な

妙なる五欲を受くとも、菩薩戒においてはななお犯と名づけ

いちねん にじよう こころ お すなわ な ぼん

ず。もし一念に二乗の心を起こさば、即ち名づけて犯と

なす」文。もんこの文に「妙なる五欲」とは、色・声・香・味・

触そくの五欲なり。ごよく色欲とは青黛・珂雪・白齒等、声とは糸竹

かんげんこう管絃、香とはなつかしきかおり、味とは猪鹿等の味、触と

は更らかなる膚等なり。はだえとうここに恒河沙劫に著すとも菩薩

戒は破れず、一念の二乗の心を起こすに菩薩戒は破ると云

える文なり。もん太賢、古迹に云わく「貪に汚さるといえども、

大心尽きず。無余の犯無きが故に、無犯と名づく」文。二乗界

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。おもむ

けごんはん華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。けごん

けごんはん華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。けごん

けごんはん華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。けごん

けごんはん華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。けごん

けごんはん華嚴・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗

に趣くを、菩薩の破とは申すなり。けごん

嫌

じよう

え

りやく

ぼんもうきよう

い

かい

をきらうなり。定・慧これを略す。梵網經に云わく「戒

い

へいち

じよう

い

しったく

ちえ

をば謂つて平地となし、定をば謂つて室宅となし、智慧を

とうみよう

もん

ば灯明となす」文。

ぼさつかい

にん

ちく

おうもん

ふたなり

ししゆ

きら

この菩薩戒は、人・畜・黄門・二形の四種を嫌わず、た

いっしゆ

ぼさつかい

さず

おし

こころ

ごじゆうにい

いちいち

だ一種の菩薩戒を授く。この教えの意は、五十二位を一々

くらい

たくていこう

へ

しゆじようかい

つ

ほとけ

な

の位に多俱低劫を経て、衆生界を尽くして仏に成るべし。

いちにん

いっしよう

ほとけ

な

な

いちぎよう

一人として一生に仏に成るもの無し。また一行をもつて

ほとけ

な

いっさいぎよう

つ

ほとけ

な

みじん

つ

仏に成ることなし。一切行を積んで仏と成る。微塵を積

しゆみせん

な

んで須弥山と成るがごとし。

けごん ほうどう ほんにや ぼんもう ようらくとう きよう むねふんみよう

華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經にこの旨分明な

にじようかい かい う きら みようらく

り。ただし、二乗界のこの戒を受くることを嫌う。妙樂、

しやく い ほつけいぜん しよきよう たず じつ

釈して云わく「あまねく法華已前の諸教を尋ぬるに、実に

にじようさぶつ もんな もん

二乗作仏の文無し」文。

つぎ えんぎよう えんぎよう ふた あ いち にぜん えん に

次に円教。この円教に二つ有り。一には爾前の円、二に

ほつけねはん えん にぜん えん ごじゆうにい かい じよう

は法華涅槃の円なり。爾前の円に五十二位、また戒・定・

え

慧あり。

にぜん えん けごんぎよう ほっかいゆいしん ほうもん もん い

爾前の円とは、華嚴經の法界唯心の法門。文に云わく

しよほつしん　とき　すなわ　しやうがく　じやう

「初発心の時、便ち正覺を成ず」。また云わく「円満修

たら　もん　じやうみやうきやう　い　が　な　ぞう　な　じゆしや　な　えんまんしゆ

多羅」文。浄名經に云わく「我無く造無く受者無けれど

ぜんあく　ごう　はいもう　もん　ねはんきやう　しよほつしん　すなわ

も、善惡の業、敗亡せず」文。般若經の「初発心より即ち

どうじやう　ぎ　もん　かんぎやう　いだいけ　すなわ

道場に坐す」の文。觀經の「韋提希、ただちに即ち

むしやうぼうにん　う　もん　ぼんもんきやう　い　しゆじやう　ぶつかい　う

無生法忍を得」の文。梵網經に云わく「衆生、仏戒を受く

くらいだいかく　どう　すなわ　しよぶつ　くらい　い　しん

れば、位大覺位に同じ、即ち諸仏の位に入り、真にこれ

しよぶつ　こ　もん　みな　に　ぜん　えん　しやうもん

諸仏の子なり」文。これは皆、爾前の円の証文なり。

おし　こころ　ごじゆうにい　あ　な　べつきやう

この教えの意は、また五十二位を明かす。名は別教の

ごじゆうにい　ぎ　変　ゆえ

五十二位のごとし。ただし、義はかわれり。その故は、

ごじゆうにいたが ぐ せんじん な しょうれつ な ぼんぷ
五十二位互いに具して、浅深も無く、勝劣も無し。凡夫も、

位を経ずとも仏にも成る。また往生するなり。煩惱も断
くらい へ ほとけ な おうじよう ぼんのう だん

ぜざれども仏に成るに障り無く、一善一戒をもつても仏
ほとけ な さわ な いちぜんいつかい ほとけ

に成る。少々開会の法門を説く処もあり。いわゆる
な しょうしょうかいえ ほうもん ところ

浄名経には凡夫を会す。煩惱・悪法も皆会す。ただし、
じようみようきよう ぼんぷ え ぼんのう あくほう みなえ

二乗を会せず。般若経の中には、二乗の学するところの
にじよう え はんにやきよう なか にじよう がく

法門をば開会して、二乗の人と悪人をば開会せず。観経等
ほうもん かいえ にじよう ひと あくにん かいえ かんぎようとう

の経に「凡夫、一毫の煩惱をも断ぜずして往生す」と説く
きよう ぼんぷ いちごう ぼんのう だん おうじよう と

は、皆、爾前の円教の意なり。法華経の円教は、後に至
みな にぜん えんぎよう こころ ほけきよう えんぎよう のち いた

つて書くべし。か

いじよう しきよう

已上、四教。

つぎ ごと

次に五時

ごじ

いち

けこんぎよう

けつきよう

ぼんもうきよう

べつ

えんにきよう

五時とは、一には華嚴經へ結経は梵網經。別・円二教

と

に

あごん

けつきよう

ゆいきようぎよう

さんぞうきよう

を説く。二には阿含へ結経は遺教經。ただ三蔵教の

しょうじよう

ほうもん

と

さん

ほうどうきよう

ほうしやくきよう

かんぎようとう

小乗の法門を説く。三には方等經。宝積經・觀經等に

せつじ

し

だいじようきよう

けつきよう

ようらくきよう

して説時を知らざる大乘經なりへ結経は瓔珞經。ただ

ぞう

つう

べつ

えん

しきよう

みなと

し

はんにゃきよう

けつきよう

し、蔵・通・別・円の四教を皆説く。四には般若經へ結経

は仁王經。通教・別教・円教の後三教を説く。三蔵教

を説かず。

華嚴經は三七日の間の説、阿含經は十二年の説、方等・

般若は三十年の説。已上、華嚴より般若に至るまでは

四十二年なり。山門の義には、方等は説時定まらず説処定ま

らず、般若經三十年と申す。寺門の義には、方等十六年、

般若十四年と申す。秘藏の大事の義には、方等・般若は説時

三十年、ただし方等は前、般若は後と申すなり。

仏は十九出家、三十成道と定むることは、大論に見え

いちだいしようぎようごじゅうねん もう

ねはんぎよう み

たり。一代聖教五十年と申すことは、涅槃經に見えたり。

ほけきよう いぜんしじゅうにねん もう

むりようぎきよう み

法華經已前四十二年と申すことは、無量義經に見えたり。

ほけきよう はちかねん もう

ねはんぎきよう ごじゅうねん もん

法華經八箇年と申すことは、涅槃經の五十年の文と

むりようぎきよう

しじゅうにねん

もん

あいだ

かんが

はちかねん

無量義經の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり。

いじよう

じゅうくしゅつけ

さんじゅうじようどう

ごじゅうねん

てんぽうりん

はちじゅうにゆうめつ

已上、十九出家、三十成道、五十年の轉法輪、八十入滅

さだ

と定むべし。

しじゅうにねん

せつきよう

みな

ほけきよう

きゆういん

ほうべん

これらの四十二年の説教は、皆、法華經の汲引の方便な

ゆえ

むりようぎきよう

い

われ

さき

どうじようぼだいじゆ

り。その故は、無量義經に云わく「我は先に道場菩提樹の

もと

たんざ

ろくねん

あのくたらさんみやくさんぼだい

じよう

下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ず

え

ほうべんりき

しじゅうよねん

ることを得たり○方便力をもつて、四十余年にはいまだ

しんじつ

あらわ

はじ

したい

あごんぎよう

と

つき

真実を顕さず○初めに四諦〈阿含経なり〉を説いて、次に

ほうどうじゅうにぶきよう

まかはんにや

けごんかいくう

と

もん

方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説く」文。

わたくし

い

せつ

しだい

じゆん

けごん

あごん

ほうどう

私に云わく、説の次第に順ずれば、華嚴・阿含・方等・

はんにや

ほつけねはん

ほうもん

せんじん

しだい

つら

あごん

ほう

般若・法華涅槃なり。法門の浅深の次第を列ねば、阿含・方

どう

はんにや

けごん

ほつけねはん

つら

ほけきよう

ねはんぎよう

等・般若・華嚴・法華涅槃と列ぬべし。されば、法華経・涅槃経

には、かくのごとく見えたり。

み

けごんしゆう

もう

しゆう

ちごんほつし

ほうぞうほつし

ちようかんほつしとう

華嚴宗と申す宗は、智儼法師・法蔵法師・澄観法師等の

にんし

けごんぎよう

よ

た

くしやしゆう

じようじつしゆう

りつしゆう

人師、華嚴経に依つて立てたり。俱舍宗・成実宗・律宗

ほうほつし こうほつし どうせんとう にんし あごんぎよう よ た

は、宝法師・光法師・道宣等の人師、阿含經に依つて立て

たり。法相宗と申す宗は、玄奘三藏・慈恩法師等、方等部

の内に上生經・下生經・成仏經・深密經・解深密經・

瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり。三論宗と申す

宗は、般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論に

依つて、吉藏大師立て給えり。

華嚴宗と申すは、華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ。

余は皆劣ると云うなるべし。法相宗には、深密・解深密經

と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の經と云う。三論宗と

けごんしゆう もう けごん ほつけ ねはん おな えんぎよう た

よ きちどうだいした たま

けごん しゆう もう けごん ほつけ ねはん おな えんぎよう た

よ みなおと い ほつそうしゆう じんみつ げじんみつきよう

けごん はんにや ほつけ ねはん おな ほどう きよう い さんろんしゆう

と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の經と云う。三論宗と

けごん はんにや ほつけ ねはん おな ほどう きよう い さんろんしゆう

と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の經と云う。三論宗と

はんにやきよう けごん ほつけ ねはん おな ほど きよう

は、般若経と華嚴・法華・涅槃は同じ程の経なり、ただ

ほつそう えきよう もろもろ しょうじようきよう おと

し、法相の依経と諸の小乗経とは劣るなりと立つ。

みな ほつけいぜん しょうきよう よ た しゅう

これらは、皆、法華已前の諸経に依って立てたる宗な

にぜん えん ごく た しゅう

り。爾前の円を極として立てたる宗どもなり。宗々の

ひとびと あらそ きようぎよう よ しょうれつ はん とき

人々の諍いは有れども、経々に依って勝劣を判ぜん時

ほけきよう すぐ にんし しゃく

は、いかにも法華経は勝れたるべきなり。人師の釈をもつ

しょうれつ ろん

て勝劣を論ずることなし。

ご ほけきよう もう かいきよう わりようぎきよう いつかん

五には、法華経と申すは、開経には無量義経へ二卷、

ほけきようはつかん けつきよう ふげんぎよう いっかん かみ しきよう しじ

法華経八卷、結経には普賢経へ一卷。上の四教・四時の

きようろん

か あ

ほけきよう

し

経論を書き挙ぐることは、この法華経を知らんがためなり。

ほけきよう

なら

さき

しよきよう

なら

なが

こころ

法華経の習いとしては、前の諸経を習わずしては永く心

う

にぜん

しよきよう

いつきよういつきよう

なら

を得ることなきなり。爾前の諸経は、一経一経を習うに、

よきよう

さた

くる

ゆえ

てんだい

おんしゃく

また余経を沙汰せざれども苦しからず。故に、天台の御釈

い

よきよう

ひろ

きようそう

あ

に云わく「もし余経を弘むるには、教相を明かさざれども、

ぎ

そこな

ほつけ

ひろ

きようそう

義において傷うことなし。もし法華を弘むるには、教相を

あ

もんぎか

もん

ほけきよう

い

明かさずんば、文義闕くることあり」文。法華経に云わく

しゆじゆ

どう

しめ

じつ

ぶつじよう

「種々の道を示すといえども、それ実には仏乗のためなり」

もん

しゆじゆ

どう

もう

にぜん

いつさいしよきよう

ぶつじよう

文。「種々の道」と申すは、爾前の一切諸経なり。「仏乗の

ため」ほけきようとは、法華經のために一切の經をいつさいば説くと申す文なり。きよう

と しよきよう

問う。諸經のごときは、あるいは菩薩のため、あるいは

にん てん

しようもん えんかく

き したが

ほうもん

人・天のため、あるいは声聞・縁覺のため、機に随つて法門

やく

きよう

にん

もかわり、益もかわる。この經はいかなる人のためぞや。

こた

きよう そうでん

し

がた

あくにん

ぜんにん

答う。この經は相伝にあらずんば知り難し。悪人・善人、

うち むち

うかい

むかい

なんし

によにん

ししゆ

はちぶ

そう

有智・無智、有戒・無戒、男子・女人、四趣・八部、総じ

じっかい

しゆじよう

あくにん

だいばだつた

て十界の衆生のためなり。いわゆる、悪人は提婆達多・

みようしようごんのう

あじやせおう

ぜんにん

いだいけとう

にん

てん

にん

うち

妙莊嚴王・阿闍世王、善人は韋提希等の人・天の人。有智

しやりほつ むち しゆりはん 特

は舍利弗、無智は須利槃どく。有戒は声聞・菩薩、無戒は

りゆう ちく によん りゆうによ そう じっかい しゆじよう えん

竜・畜なり。女人は竜女なり。総じて十界の衆生、円の

いっぽう さと し がくしや ほけきよう

一法を覚るなり。このことを知らずして、学者、「法華経は

われ ぼんぷ もう ぶつ い おそ

我ら凡夫のためにはあらず」と申す。仏意恐れあり。

きよう い いっさい ぼさつ あのかたらさんみやくさんぼだい

この経に云わく「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、

みな きよう ぞく もん もん ぼさつ くかい しゆじよう

皆この経に属せり」と文。この文の菩薩とは、九界の衆生、

ぜんにん あくにん によん なんし さんぞうきよう しょうもん えんがく ぼさつ つうぎよう

善人・悪人、女人・男子、三蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教

さんじよう べつきよう ぼさつ にぜん えんぎよう ぼさつ みな きよう ちから

の三乗、別教の菩薩、爾前の円教の菩薩、皆この経の力

ほとけ な もう もん きよう

にあらずんば仏に成るまじと申す文なり。またこの経に

い やくおう おお ひとあ ざいけ しゅつけ ぼさつ どう ぎよう

云わく「薬王よ。多く人有つて在家・出家にて菩薩の道を行

ほけきよう けん もん どく じゆ しょ じ くよう

ぜんに、もしこの法華經を見・聞・読・誦・書・持・供養す

う あた まさ し ひと

ることを得ること能わずんば、当に知るべし、この人はい

よ ぼさつ どう ぎよう きようてん き

まだ善く菩薩の道を行ぜず。もしこの經典を聞くことを

うえ すなわ ぼさつ どう ぎよう もん

得ることあらば、乃ちよく菩薩の道を行ず」。この文は、

けんねん ごんきよう ぼさつ さんぎひやつこう どうゆじんごう むりようあそうぎこう

顕然に権教の菩薩の三祇百劫・動逾塵劫・無量阿僧祇劫の

あいだ ろくどまんぎよう しぐせいがん きよう いた ぼさつ

間の六度万行・四弘誓願は、この經に至らざれば、菩薩

ぎよう ぜんこん しゆ もん

の行にはあらず、善根を修したるにもあらずという文なり。

ぼさつ ぎよう な ほとけ けんねん

また菩薩の行無ければ、仏にも成らざることも顕然なり。

てんだい みようらく まつだい ほんぷ かんじん もん もんぐ い

天台・妙楽の末代の凡夫を勧進する文。文句に云わく

こうけん じ しょ め ひやくい びんが かいこ あ

「好堅、地に処して牙すでに百圀せり。頻伽、𩇑に在つて、

こえしゅちよう すぐ もん

声衆鳥に勝れたり」文。

もん ほけきよう ごじつてんでん だいごじゅう くどく しゃく もん

この文は、法華經の五十展轉の第五十の功德を釈する文

ほとけねんご ごじつてんでん と たも ごんきよう たこう

なり。仏苦ろに五十展轉にて説き給うこと、權教の多劫

しゅぎよう だいしよう くどく きよう しゅゆ けちえん

の修行また大聖の功德よりも、この經の須臾の結縁、

ぐにん ずいき ひやくせんまんおくすぐ きよう み

愚人の随喜の百千万億勝れたること經に見えつれば、こ

こころ だいしたと あらわ たま こうけんじゅ もう き

の意を大師譬えをもつて顕し給えり。好堅樹と申す木は、

いちにち ひやくい たか 生 びんが もう とり おさな もろもろ

一日に百圀にて高くおう。頻伽と申す鳥は、幼きだも諸

だいしよう とり こえ すぐ めんきよう しゆぎよう ひさ もろもろ

の大小の鳥の声に勝れたり。権教の修行の久しきに諸

そうもく おそ しょうちよう たと ほつけ ぎよう すみ ほとけ

の草木の遅く生長するを譬え、法華の行の速やかに仏

な いちにち ひやくい たと めんきよう だいしよう ひじり

に成ることを一日に百回なるに譬う。権教の大小の聖を

しちよう たと ほつけ ほんぷ かいご こえ しちよう

ば諸鳥に譬え、法華の凡夫のはかなきを鷲の声の衆鳥に

すぐ たと

勝るるに譬う。

みようらくだいし かさ しゃく い おそ ひとあやま

妙楽大師、重ねて釈して云わく「恐らくは、人謬つて

げ もの しょうしん くどく だい はか く じようい

解せる者、初心の功德の大なることを測らずして、功を上位

ゆず しょうしん あなど ゆえ いま か ぎようあき くふか

に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深き

しめ きようりき あらわ もん まつだい ぐしや

ことを示して、もつて経力を顕す」文。末代の愚者、

ほけきよう　じんり

「法華経は深理にしていみじけれども、我が機に叶わず」

い　ほう　あ　き　くだ　たい　もの　しゃく　もん

と云つて、法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

みようらくだいし　まつだい　ほう　す

また、妙楽大師、末代にこの法の捨てられんことを歎い

い　えんどん　き　すうちよう　まこと　きんだい

て云わく「この円頓を聞いて崇重せざるは、良に近代に

だいじよう　なら　もの　ぞうらん　よ　ゆえ　ぞうまつ　じよう

大乘を習う者の雑濫に由るが故なり。いわんや、像末は情

うす　しんじん　かはく　えんどん　きようほうくら　み　はこ　み

澆く信心寡薄にして、円頓の教法蔵に溢ち函に盈つれども、

しゆい　すなわ　みようもく　いた　しょう

しばらくも思惟せず、便ち冥目に至る。いたずらに生じ、

し　いつ　なん　いた　ひと　い　き

いたずらに死す。一に何ぞ痛ましきや。ある人云わく『聞い

ぎよう　なんじ　なん　あず

て行ぜずんば、汝において何ぞ預からん』。これはいまだ

ふか くおん やく し ぜんじゅうてんしきよう

もんじゆ

深く久遠の益を知らず。善住天子経のごとくんば、『文殊は

しやりほつ っ ほう き ぼう しょう じごく お ごうじや

舍利弗に告ぐ。法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは、恒沙

ほとけ くよう もの すぐ じごく お じごく

の仏を供養する者に勝る。地獄に墮つといえども、地獄よ

い かえ ほう き う ほとけ く

り出でて還つて法を聞くことを得』と。これは、仏を供し

ほう き もの きょうりよう き ぼう しょう

法を聞かざる者をもつて校量とせり。聞いて謗を生ずる、

おんしゆ き しゆい つと しゆじゆう

なお遠種となる。いわんや、聞いて思惟し、勤めて修習せ

んをや」。

い いく たましい そ ひがん

また云わく「一句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸を

たす しゆい しゆじゆう なが しゆうこう ゆう ずいき けんもん

資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり。随喜・見聞

すれば、つねに主伴しゅばんとなる。もしは取しゅ、もしは捨しゃ、耳みみに経へて

縁えんと成り、あるいは順じゆん、あるいは違い、終ついにこれに因よつて脱だつ

す」文もん。私わたくしに云いわく「もしは取しゅ、もしは捨しゃ」「あるいは順じゆん、

あるいは違い」の文もんは、肝きもに銘めいずるなり。

法華翻経後記ほつけほんぎようごき〈釈僧肇記しやくそうじようきす〉に云いわく「什じゆう〈羅什三蔵

なり〉、姚興ようこう〈王おう〉に對こたえて曰いわく『予よ、昔むかしてんじくこく天竺国あに在り

し時とき、あまねく五竺ごじくに遊あそんで大乘だいじようを尋じんとう討だいしし、大師しゆり・須梨耶や

蘇摩そまに従したがつて理味りみを餐受きんじゆす。頂いただきを摩なでてこの経きようを囑累ぞくるい

して言いわく、仏日西ぶつにちにしに隠かくれ、遺光東北いこうとうほくを照てらす。この典ふみ、東北とうほく

の諸国しよこくに有縁うえんなり。汝なんじ、慎つしんで伝弘でんぐせよと』と文もん。私わたくし

に云いわく、天竺てんじくよりは、この日本にほんは東北とうほくの州くになり。

恵心えしんの一乗いちじよう要決ようけつに云いわく「日本にほん一州いつしゆう、円機えんき純熟じゆんじゆくせり。

朝野ちようや・遠近えんきん同じく一乗いちじように帰きし、緇素しそ・貴賤きせんことごとく成仏じようぶつ

を期ごす。ただ一師いつし等とうあつて、もし信受しんじゆせずんば、権ごんとやせ

ん、実じつとやせん。権ごんならば貴たつとぶべし。浄名じようみように云いわく『衆もろもろ

の魔事まじを覚知かくちして、その行ぎように随したがうを示しめす。善力ぜんりき方便ほうべんをも

つて、意いに随したがつて皆度みなどす』。実じつならば憐あわれむべし。この経きよう

に云いわく『当来世とうらいせの悪人あくにんは、仏ほとけの一乗いちじようを説ときたもうを聞きい

て、迷惑めいわくして信受しんじゆせず。法ほうを破はして惡道あくどうに墮おちん』と」文もん。

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經

みよう

げんぎ

てんだい

い

い

みよう

みよう

妙は、玄義へんぎ〈天台〉に云わく「言うところの妙とは、妙

ふかしぎ

な

い

ひみつ

おうぞう

ひら

は不可思議ふかしぎに名づくるなり」。また云わく「秘密ひみつの奥藏おうぞうを發

しやう

みよう

い

みよう

さいしやう

く。これを稱しょうして妙となす」。また云わく「妙とは、最勝さいしやう

しゆたら

かんろ

もん

ゆえ

みよう

い

修多羅、甘露かんろの門もんなり。故に妙ゆえと言うなり」。

ほう

げんぎ

い

い

ほう

じっかいじゆうによ

法は、玄義げんぎに云わく「言うところの法とは、十界十如、

ごんじつ

ほう

い

ごんじつ

しやうき

しめ

ゆえ

ごう

権実ごんじつの法なり」。また云わく「権実ごんじつの正軌しやうきを示す。故に号し

ほう

て法となす」。

れんげ

げんぎ

い

れんげ

ごんじつ

ほう

たと

蓮華は、玄義に云わく「蓮華とは、権実の法に譬うるな

い

くおん

ほんが

さ

たと

はちす

り」。また云わく「久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮を

ふに

えんどう

え

たと

はな

もつてす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもつて

もん

す」文。

きよう

げんぎ

い

こえ

ぶつじ

しよう

きよう

経は、玄義に云わく「声、仏事をなす。これを称して経

もん

となす」文。

わたくし

い

ほつけいぜん

しよきよう

しようじよう

こころしよう

私に云わく、法華已前の諸経に、小乗は心生ずれ

ろっかい

こころめつ

しかい

つうぎよう

ば六界、心滅すれば四界なり。通教もつてかくのごとし。

にぜん べつ えん にきよう しんしょう じっかい しょうじよう こころ

爾前の別・円の二教は、心生の十界なり。小乗の意は、

ろくどうししよう くらく しゅじよう こころ しょう なら こころ

六道四生の苦樂は衆生の心より生ずと習う。されば、心

めつ ろくどう いんが な だいじよう こころ こころ

滅すれば、六道の因果は無きなり。大乘の心は、心より

じっかい しょう けこんぎよう い こころ たく えし しゅじゅ

十界を生ず。華嚴經に云わく「心は工みなる画師の種々の

ごおん つく いっさいせけん なか ほう つく

五陰を造るがごとく、一切世間の中に法として造らざるこ

もん しゅじゅ ごおん じっかい ごおん ぶっかい

となし」文。「種々の五陰」とは、十界の五陰なり。仏界を

しんぼう つく なら こころ かこ げんざい みらい じっぼう ほとけ

も心法をも造ると習う。心が過去・現在・未来の十方の仏

あらわ なら けこんぎよう い ひと さんぜ いっさい

と顕ると習うなり。華嚴經に云わく「もし人、三世の一切

ほとけ りようち ほつ まさ かん

の仏を了知せんと欲せば、応当にかくのごとく観ずべし、

こころ もろもろ によらい つく

心は諸の如来を造ると」。

ほつけいぜん きよう

掟

じようぼん

じゆうあく

じごく

いんごう

法華已前の経のおきては、上品の十悪は地獄の引業、

ちゆうぼん

じゆうあく

がき

いんごう

げぼん

じゆうあく

ちくしろう

いんごう

中品の十悪は餓鬼の引業、下品の十悪は畜生の引業、

ごじよう

しゆら

いんごう

さんきごかい

にん

いんごう

さんきじゆうぜん

ろくよく

五常は修羅の引業、三帰五戒は人の引業、三帰十善は六欲

てん いんごう

うろ

ぎぜん

しきかい

むしきかい

いんごう

ごかい

はつ

天の引業なり。有漏の坐禅は色界・無色界の引業、五戒・八

かい じつかい

じゆうぜんかい

にひやくごじつかい

ごひやくかい

かみ

く

くう

むじよう

戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・

むが かん

しようもん

えんがく

いんごう

ごかい

はつかい ないしさん じゆじようかい

無我の観は声聞・縁覚の引業、五戒・八戒乃至三聚浄戒の

かみ ろくど

しぐ

ぼだいしん

おこ

ぼさつ

ぶつかい

いんごう

上に六度・四弘の菩提心を発すは菩薩なり、仏界の引業な

ぞう つうにきよう

ぶつしろう

さた

ぼさつ

ほっしん

り。蔵・通二教には、仏性の沙汰なし。ただ菩薩の発心を

ぶつしょう

べつ

えん

にきよう

しゆじよう

ぶつしょう

ろん

仏性という。別・円の二教には、衆生に仏性を論ず。た

べつきよう

こころ

にじよう

ぶつしょう

ろん

にぜん

えんぎよう

だし、別教の意は、二乗に仏性を論ぜず。爾前の円教は、

べつきよう

ふ

にじよう

ぶつしょう

さたな

みな

そほう

別教に附して二乗の仏性の沙汰無し。これらは皆、麤法な

り。

いま

みようほう

じっかい

たが

ぐ

と

とき

今の妙法とは、これらの十界を互いに具すと説く時、

みようほう

もう

じっかいご

もう

じっかい

うち

いつかい

妙法と申す。十界互具と申すことは、十界の内に、一界に

よ ぐ

じっかいたが

ぐ

ひやつぼうかい

げんぎ

余の九界を具し、十界互いに具すれば百法界なり。玄義の

に い

いつぼうかいあ

くほうかい

ぐ

すなわ

ひやつぼうかい

二に云わく「一法界有つて九法界を具すれば、即ち百法界

あ もん ほけきよう

べつ

じっかい

いんが

にぜん

きよう

有り」文。法華経とは別のことなし。十界の因果は爾前の経

あ いま じつかい いんがごご 掟
に明かす。今は十界の因果互具をおきてたるばかりなり。

にぜん きよう こころ ぼさつ ほとけ な しようもん ほとけ
爾前の経の意は、菩薩をば仏に成るべし、声聞は仏

な と ぼさつ よろこ しようもん 歎

に成るまじなんと説けば、菩薩は悦び、声聞はなげき、

にんてんとう 思 きよう あ

人天等はおもいもかけずなんとある経も有り。あるいは

にじよう けんじ だん ろくどう い おも ぼさつ

二乗は見思を断じて六道を出でんと念い、菩薩はわざと

ぼんのう だん ろくどう う しゆじよう りやく おも

煩惱を断ぜず六道に生まれて衆生を利益せんと念う。ある

ぼさつ とんごじようぶつ み ぼさつ たくていこう しゆぎよう

いは菩薩の頓悟成仏を見、あるいは菩薩の多俱低劫の修行

み ぼんぷおうじよう むね と ぼさつ しようもん

を見、あるいは凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞のため

み にん ふじようぶつ わ ふじようぶつ にん じようぶつ

にはあらずと見て、人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は

わ じようぶつ ぼんぷ おうじよう わ おうじよう しょうにん けんじだん われ
我が成仏、凡夫の往生は我が往生、聖人の見思断は我ら

ぼんぷ けんじだん し しじゅうにねん す

凡夫の見思断とも知らずして、四十二年は過ぎしなり。

いま きよう じっかいごぐ だん とき しょうもん
しかるを、今の経にして十界互具を談ずる時、声聞の

じじよう じど み ぼさつかい ぐ ろくどまんぎよう しゆ

自調自度の身に菩薩界を具すれば、六度万行も修せず

たくていこう へ しょうもん もろもろ ぼさつ 辛 しゆ

多俱低劫も経ぬ声聞が、諸の菩薩のからくして修したり

むりようむへん なんぎようどう しょうもん ぐ 思

し無量無辺の難行道が声聞に具するあいだ、おもわざる

ほか しょうもん ぼさつ い にん 責 ごくそつ けんどん ぼんぷ

外に、声聞が菩薩と云われ、人をせむる獄卒、慳貪なる凡夫

ぼさつ い ほとけ いん い こ ぼさつかい おさ

もまた菩薩と云わる。仏もまた因位に居して菩薩界に摂め

みようかく とうかく やくそうゆほん しょうもん と い

られ、妙覚ながら等覚なり。菓草喩品に声聞を説いて云わ

なんだち ぎょう

ぼさつ どう

われ

く「汝等が行ずるところは、これ菩薩の道なり」。また我ら

ろくど

ぎょう

ろくどまんぞく

ぼさつ

もん

きょう

い

六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩なる文。経に云わく

ろくはらみつ

しゅぎょう

え

「いまだ六波羅蜜を修行することを得ずといえども、

ろくはらみつ

じねん

ざいぜん

われ

いつかい

う

じかい

六波羅蜜は自然に在前す」。我ら一戒をも受けざるが持戒の

もの

い

もん

きょう

い

すなわ

ゆうみょう

者と云わるる文。経に云わく「これは則ち勇猛なり。こ

すなわ

しょうじん

かい

たも

ずだ

ぎょう

もの

な

れは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名

もん

づく」文。

と

い

しよきょう

あくにん

ほとけ

な

けこんぎょう

問うて云わく、諸経にも、悪人の仏に成るは、華嚴経の

じようだつ

じゆき

ふちようきよう

じやおう

じゆき

だいじつきよう

ばすてんし

調達の授記、普超経の闍王の授記、大集経の婆藪天子の

授記。また女人の仏に成るは、胎經の釈・女の成仏。

ちくしょう ほとけ な あんぎよう こうじやく じゆき にじよう ほとけ な

畜生の仏に成るは、阿含經の鵠雀の授記。二乗の仏に成

ほうどう 陀羅 尼きよう しゆりようあんきようとう ぼさつ ほとけ な

るは、方等だらに經、首楞嚴經等なり。菩薩の仏に成

けこんぎようとう ぐばく ほんぷ おうじよう かんぎよう げほんげしようとう

は、華嚴經等。具縛の凡夫の往生は、觀經の下品下生等。

によん によん てん そうかんぎよう しじゅうはちがん なか さんじゅうご

女人の女身を転ずるは、双觀經の四十八願の中の三十五の

がん ほけきよう にじよう りゆうによ だいば ぼさつ じゆき

願。これらは法華經の二乗・竜女・提婆・菩薩の授記にい

変 目 変 目

かなるかわりめかある。また、たといかわりめはありとも、

しよきよう じようぶつ 疑

諸經にても成仏はうたがいなし、いかな。

こた よ なら つた ほうもん こた あらわ

答う。予の習い伝うるところの法門、この答えに顕るべ

こた ほけきよう しよきよう ちようか しよきよう じようぶつ
し。この答えに、法華經の諸經に超過し、また諸經の成仏

ゆる ゆる き ひぞう ゆえ けんろ か
を許し許さずは聞こうべし。秘藏の故に顕露に書かず。

と い みようほう いちねんさんぜん い
問うて曰わく、妙法を一念三千と云うこと、いかん。

こた い てんだいだいし ほうもん さと たま のち げんぎ
答えて曰わく、天台大師、この法門を覚り給いて後、玄義

じっかん もんぐじっかん かくいざんまい しょうしかん じようみようしよ しねんじよ しだい
十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処・次第

ぜんもんとう おお ほうもん と たま いちねんさんぜん
禪門等の多くの法門を説き給いしかども、この一念三千を

だんぎ たま じっかい ひやつかい せんによ ほうもん
ば談義し給わず。ただ十界・百界・千如の法門ばかりにて

おわしまししなり。御年五十七の夏四月の比、荊州の

ぎよくせんじ もう ところ みでし しょうあんだいし もう ひと と 聞
玉泉寺と申す処にて、御弟子・章安大師と申す人に説きき

たま

しかんじつかん

かみ

しじよう

惜

たま

かせ給いし止観十卷あり。

上の四帖になおおしみ給いて、

ろくそく

ししゅざんまいとう

ほうもん

ご

まき

ただ六即・四種三昧等ばかりの法門にてありしに、五の卷よ

じつきようじゆうじよう

た

いちねんさんぜん

ほうもん

か

たま

り十境十乗を立てて一念三千の法門は書き給えり。これ

みようらくだいし

まつだい

ひと

かんじん

宣

を妙楽大師、末代の人に勧進してのたまわく「ならびに

さんぜん

しなん

こ

たず

よ

もの

こころ

いえん

三千をもつて指南となす○請う、尋ね読まん者、心に異縁

な

もん

ろくじつかん

さんぜんちよう

おお

ほうもん

よしな

無かれ」文。六十卷・三千丁の多くの法門も由無し。ただ

はじ

に

さんぎよう

こころう

この初めの二・三行を意得べきなり。

しかん

てんだい

い

そ

いっしん

じつぼうかい

ぐ

いっぼうかい

止観〈天台〉に云わく「夫れ、一心に十法界を具す。一法界

じつぼうかい

ぐ

ひやつぼうかい

いっかい

さんじっしゅ

にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界に三十種の

世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。

この三千、一念の心に在り」文。妙楽承け、釈して云わ

く「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の

時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」文。

日本の伝教大師、比叡山の立ちし時、根本中堂の地を引

き給いし時、地中より舌八つある鑰を引き出だしたりき。

この鑰をもつて入唐の時に、天台大師より第七代、妙楽

大師の御弟子・道邃和尚に値い奉つて天台の法門を伝え

し時、天機秀発の人たりしあいだ、道邃和尚悦んで天台の

つく たま じゅうご きょうぞう ひら み たま じゅうし ひら

造り給える十五の経蔵を開き見せしめ給いしに、十四を開

いちぞう ひら とき でんぎようだいし いし いちぞう

いて一蔵を開かず。その時、伝教大師云わく「師、この一蔵

ひら たま こ たま すいかしやうい いちぞう ひら

を開き給え」と請い給いしに、邃和尚云わく「この一蔵は開

かぎな てんだいだいし みずか よ い ひら たも

くべき鑰無し。天台大師自ら世に出でて開き給うべし」

うんぬん とき でんぎようだいし にほん ずいしん かぎ ひら

云々。その時、伝教大師、日本より隨身の鑰をもつて開き

たま きょうぞう ひら きょうぞう うち ひかり

給いしに、この経蔵開きたりしかば、経蔵の内より、光、

しつ み ひかり もと たず いちねんさんぜん

室に満ちたりき。その光の本を尋ねれば、この一念三千の

もん ひかり はな

文より光を放ちたりしなり。ありがたかりしことなり。そ

とき すいかしやう かえ でんぎようだいし らいはい たま てんだいだいし

の時、邃和尚は返って伝教大師を礼拝し給いき。「天台大師

ごしん うんぬん

てんだい

きようぞう

しよしやく

のこ な

にほん

の後身」云々。よつて、天台の経蔵の所収は、遺り無く日本

わた

てんだいだいし

ごじひつ

かんのうぎよう

しやうあんだいし

に亘りしなり。天台大師の御自筆の観音経、章安大師の

じひつ

しかん

いまひえいざん

こんぽんちゆうどう

おさ

自筆の止観、今比叡山の根本中堂に収めたり。

いち

じしやう

じりき

かびらげどう

一、自性

自力

迦毘羅外道

に

たしやう

たりき

うるそうぎやげどう

二、他性

他力

漚楼僧伽外道

ししやうけい

さん

ぐうしやう

ぐうりき

ろくしやばげどう

四性計

三、共性

共力

勒娑婆外道

し

むいんしやう

むいんりき

じねんげどう

四、無因性

無因力

自然外道

げどう

さんにん

いち

ぶつぽうげ

げどう

くじゆうごしゆ

げどう

外道に三人あり。一には仏法外の外道へ九十五種の外道へ、

に

ふぶつぽう

げどう

しやうじやう

さん

がくぶつぽうじやう

げどう

みやうほう

二に附仏法の外道へ小乗へ、三には学仏法成の外道へ妙法

し だいじよう げどう
を知らざる大乘の外道なり。

いま ほけきよう じりき さだ じりき じっかい いっさい
今の法華経は、自力も定めて自力にあらず。十界の一切

しゅじよう ぐ じ ゆえ わ みもと じ ぶっかい
衆生を具する自なるが故に。我が身に本より、自の仏界、

いっさいしゅじよう た ぶっかい わ み ぐ いま ほとけ
一切衆生の他の仏界、我が身に具せり。されば、今、仏に

な しんぶつ たりき さだ たりき
成るに、新仏にあらず。また他力も定めて他力にあらず。

たぶつ われ ほんぷ みずか ぐ ゆえ たぶつ われ
他仏も我ら凡夫の自ら具せるが故に。また他仏が我らがご

じ げんどう とも むいん りやく
とくの自に現同するなり。共と無因は略す。

ほけきよう いぜん しよきよう じっかい ご ぐ あ ほとけ な
法華経已前の諸経は、十界互具を明かさざれば、仏に成

ねが かなら くかい うと くかい ぶっかい ぐ
らんと願うには必ず九界を厭う。九界を仏界に具せざるが

ゆえ

故なり。されば、必ず悪を滅し煩惱を断じて仏には成る

だん

ぼんぷ

み

ほとけ

ぐ

い

ゆえ

と談ず。凡夫の身を仏に具すと云わざるが故に。されば、

にんてん

あくにん

み

うしな

ほとけ

な

もう

人天・悪人の身をば失つて仏に成ると申す。これをば、

みようらくだいし

えんりだんく

ほとけ

な

にぜん

きよう

妙楽大師は厭離断九の仏と名づく。されば、爾前の経の

ひとびと

ほとけ

くかい

かたち

あらわ

ほとけ

ふしぎ

じんぺん

人々は、仏の九界の形を現すは、ただ仏の不思議の神変

おも

ほとけ

み

くかい

もと

げん

い

と思い、仏の身に九界が本よりありて現ずるとは云わず。

じつ

探

たも

ほっけいぜん

ごんじや

されば、実をもつてさぐり給うに、法華已前にはただ権者

ほとけ

あ

じつ

ぼんぷ

ほとけ

な

な

の仏のみ有つて、実の凡夫が仏に成りたりけることは無

ぼんのう

だん

くかい

いと

ほとけ

な

ねが

じつ

きなり。煩惱を断じ九界を厭つて仏に成らんと願うは、実

くかい はな

ほとけ な ゆえ

おうじよう

じつ ぼんぷ

には九界を離れたる仏無き故に、往生したる実の凡夫も

な にかい はな

ぼさつかい な ゆえ

ほつけ ほとけ

無し。人界を離れたる菩薩界無き故に。ただ法華の仏の、

にぜん

じつかい かたち

あらわ

しよけ

のうけ

あくにん

爾前にして十界の形を現して、所化とも能化とも、悪人と

ぜんにん

げどう

い

じつ

あくにん

ぜんにん

げどう

ぼんぷ

も善人とも外道とも云いしなり。実の悪人・善人・外道・凡夫

ほうべん

ごん

ぎよう

しんじつ

おし

打

おも

過

は、方便の権を行じて真実の教えとうち思いなしてすぎし

ほけきよう

きた

ほうべん

じつ

けんじ

ほどに、法華經に來つて、「方便にてありけり。実には見思・

むみよう

だん

おうじよう

かくち

無明も断ぜざりけり。往生もせざりけり」なんと覺知する

なり。

いちねんさんぜん

べつ

くわ

か

一念三千は別に委しく書くべし。

きよう

にみよう

しやく

い

きよう

にみよう

この経には二妙あり。釈に云わく「この経はただ二妙

ろん

いち

そうだいみよう

に

ぜつだいみよう

そうだいみよう

のみを論ず」。一には相待妙、二には絶待妙なり。相待妙

こころ

さき

しじ

いちだいしようぎよう

ほけきよう

たい

にぜん

の意は、前の四時の一代聖教に法華経を対して爾前とこ

きら

にぜん

とうぶん

い

ほつけ

かせつ

もう

ぜつだいみよう

れを嫌い、爾前をば当分と云い法華を跨節と申す。絶待妙

こころ

いちだいしようぎよう

ほつけ

かいえ

の意は、一代聖教は法華なりと開会す。

ほけきよう

ふた

いち

しよかい

に

のうかい

また法華経に二つのことあり。一には所開、二には能開な

かいじごにゆう

もん

みな

ぶつどう

じよう

り。開示悟入の文、あるいは「皆すでに仏道を成じたり」

とう

もん

いちぶはつかんにじゆうはつぽんろくまんくせんさんびやくはちじゆうしじ

いちいち

じ

等の文、一部八卷二十八品六万九千三百八十四字、一々の字

もと

みなみよう

もんじ

のうかい

みよう

の下に皆妙の文字あるべし。これ能開の妙なり。この

ほけきよう

し

なら だん

にぜん きよう

法華経は、知らずして習い談ずるものは、ただ爾前の経の

りやく

利益なり。

あこんぎようかいえ もん

きよう い

わ

くぶ

ほう

阿含経開会の文は、経に云わく「我がこの九部の法は、

しゅじよう ずいじゆん

と

だいじよう

い

ほん

衆生に随順して説く。大乘に入るることを本となす」

うんぬん

けこんぎようかいえ もん

い

いつさいせけん

てん

にん

云々。華嚴経開会の文に云わく「一切世間の天・人および

あしゆら

みなおも

いま

しやかむにぶつ

とう

もん

はんにやきよう

阿修羅は、皆謂えり。今の釈迦牟尼仏は」等の文。般若経

かいえ もん

あんらくぎようほん

じゅうはつくう

もん

かんぎようとう

おうじようあんらく

開会の文は、安樂行品の十八空の文。觀経等の往生安樂

かいえ もん

みようじゅう

すなわ

あんらくせかい

ゆ

開会の文は、「ここにおいて命終して、即ち安樂世界に往

とう

もん

さんぜんかいえ

もん

ひと

むむぶつ

とな

みな

く」等の文。散善開会の文は、「二たび南無仏と称えば、皆

ぶつどう

じよう

もん

いつさいしゅじようかいえ

もん

いま

すでに仏道を成じたり」の文。一切衆生開会の文は、「今

さんがい

みな

わ う

なか しゅじよう

この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごと

わ こ

げてんかいえ

もん

ぞつけん

きようしよ

とくこれ吾が子なり」。外典開会の文は、「もし俗間の経書、

じせ

ごごん

ししよう

ごうとう

と

みなしようほう

じゆん

もん

治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」文。

とそつ

かいえ

もん

にんてん

かいえ

もん

繁

出

兜率開会の文、人天の開会するところの文、しげきゆえにい

ださず。

きよう

こころえ

ひと

きよう

もん

きよう

よ

この経を意得ざる人は、経の文にこの経を読んで、

にんてん

しよう

と

もん

み

とそつ

とうり

人天に生ずと説く文を見、あるいは兜率・忉利などに

至

もん

み

あんよう

しよう

もん

み

えど

いたる文を見、あるいは安養に生ずる文を見て、「穢土に

ほつけ ぎよう きよう

ぎようじや ふたいじ

おいて法華を行ぜば、経はいみじけれども、行者、不退地

いた

えど

るてん

ひさ

ごじゅうろくおくしちせんまんさい

に至らざれば、穢土にして流転し、久しく五十六億七千万歳

あした

ご

にん

ちくとう

う

きやくしやう

あいだ

の晨を期し、あるいは人・畜等に生まれて隔生する間、

みずか

くる

かぎ

な

うんぬん

じりき

自らの苦しみ限り無し」なんと云々。あるいは「自力の

しゆぎよう

なんぎようどう

とううんぬん

おそ

にぜん

修行なり。難行道なり」等云々。これは、恐らくは爾前・

ほつけ

にと

し

じしんおろ

やみ

まよ

法華の二途を知らずして、自身癡かの闇に迷うのみにあら

いつさいしゆじよう

ぶつげん

と

ひと

ず、一切衆生の仏眼これを閉ずる人なり。

とそつ

すす

しやうじようきよう

おお

すこ

兜率を勧めたることは、小乗経に多し。少しは

だいじようきよう

すす

さいほう

すす

だいじようきよう

大乘経にも勧めたり。西方を勧めたることは、大乘経に

おほ みなしよかい もん ほつけ こころ とそつ そく

多し。これらは皆所開の文なり。法華の意は、兜率に即し

じつぼうぶつど うち さいほう そく じつぼうぶつど うち にんてん

て「十方仏土の中」、西方に即して「十方仏土の中」、人天に

そく じつぼうぶつど うち うんぬん ほけきよう あくにん たい

即して「十方仏土の中」云々。法華経は、悪人に対しては、

じつかい あく と あくにんごげん ぐ あくにん

十界の悪を説けば悪人五眼を具しなんどすれば、悪人の

極 すく によにん そく じつかい だん

きわまりを救い、女人に即して十界を談ずれば、十界皆女人

だん ほつけえんじつ ぼだいしん おこ ひと

なることを談ず。いずれにも法華円実の菩提心を発さん人

まよ くかい べんりき ひ

は、迷いの九界へ業力に引かるることなきなり。

こころ ぞん たま ほうねんしょうにん いっこうねんぶつ

この意を存じ給いけるやらん、法然上人も、一向念仏の

ぎようじや せんちやく もう ふみ ぞうぎよう なんぎようどう

行者ながら、選択と申す文には、雑行・難行道には

ほつけ だいにちきようとう

のぞ

ところ

あ

くわ

み

法華・大日経等をば除きたる処も有り。委しく見よ。ま

えしん

おうじようようしゆう

ほけきよう

のぞ

ほうねん

た恵心の往生要集にも、法華経を除きたり。たとい法然

しようにん

えしん

ほけきよう

ぞうぎよう

なんぎようどう

まつだい

き

かな

上人・恵心、法華経を難行・難行道、末代の機に叶わず

か たも

にちれん

まつた

用

いちだいしようぎよう

と書き給うとも、日蓮は全くもちいべからず。一代聖教

掟

たが

さんぜじつぼう

ぶつだ

じようごん

い

ゆえ

のおきてに違い、三世十方の仏陀の誠言に違する故に。

況

義な

のち

ひとびと

しようそく

いおうや、そのぎ無し。しかるに、後の人々の消息に、

ほけきよう

なんぎようどう

きよう

まつだい

き

かな

法華経を難行道、経はいみじけれども末代の機に叶わず、

ぼう

つみ

じようど

わた

ほけきよう

さと

謗ぜばこそ罪にてもあらめ、浄土に過つて法華経をば覚る

うんぬん

にちれん

こころ

僻

ごと

おぼ

べしと云々。日蓮が心は、いかにもこのことはひが事と覚

ゆるなり。こう申すもひが事ことにやあるらん。能く能く智人ちじんに

なら

習うべし。

しょうかにねんにがつじゅうよつか

正嘉二年二月十四日

にちれんせん

日蓮撰す。